OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語における『聖書』由来の語彙（Ⅳ）：“目からウロコ（が落ちる）”をめぐって
Author(s)	三宅, 知宏
Citation	現代日本語研究. 2019, 11, p. 91-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73342
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本語における『聖書』由来の語彙（Ⅳ）

―“目からウロコ（が落ちる）”をめぐって―

On Japanese Vocabulary Originated from the Bible:
Focusing on the Idiomatic Phrase *me kara uroko (ga otiru)*

三宅　知宏
MIYAKE Tomohiro

キーワード：“目からウロコ（が落ちる）”，聖書，構文，文型，慣用句

要　旨

本稿は，日本語において『聖書』に由来すると考えられる語彙の中で，“目からウロコ（が落ちる）”という慣用表現を取り上げ，その意味・用法の記述，分析を行うことを目的としたものである。既存の辞書で記述されていない用法も観察した上で，そのような用法も含めて記述し，用法間の関係，及び拡がりについて分析を行った。その際，『聖書』における原義からの類推だけでなく，“ＡカラＢ”という言語形式の「型」（「構文」）による類推という面も想定されることを示唆した。

１．はじめに

本稿は，日本語において『聖書』に由来すると考えられる語彙の中で，“目からウロコ（が落ちる）”という慣用表現を取り上げ，その意味・用法の記述，分析を行うことを目的とする。

本稿が関心を持つ表現は，次のようなものである[1)]。

(1) そのときの驚きをどう表現すればよいのでしょう。まさに目からウロコが落ちた思いでした。[B]

(2) 気づいたのは，大学生になってある食べ物と出会ったときです。いやあ，仰天しました，目からウロコが落ちました。まさにコペルニクス的

転回でした。[B]

(3) しかも力もいらず，誰にでもきれいなクラッシュアイスができるのです。まさに目からウロコの裏ワザですね。[B]

これらは,文字通りの意味とは異なる,慣用的な意味を表していると言える。

ただし，その慣用的な意味は単一ではなく，いくつかの「用法」を持っていると思われる。さらに言うと，そのような「用法」の中には，既存の辞書の記述では説明できないものもある。

本稿は，まずこの表現について，従来指摘されていない用法も含めて，幅広い用例に基づいた，記述を行う。そして，記述された用法間の関係，及び拡がりについても分析を行おうとするものである。

本稿は，次のような構成をとる。次の **2**.において，予備的考察として，出典となった『聖書』の箇所の解釈と，既存の辞書の記述について確認する。また，この表現の形態的バリエーションについてもふれておく。**3**.において，この表現の意味について，複数の用法に分けて記述する。**4**.において，前節で記述した一つの用法について，「構文」の観点から分析する。 **5**.でまとめを行う。

2．予備的考察

2．1．出典となった『聖書』の箇所とその解釈

本稿が考察の対象とする“目からウロコ（が落ちる)”という慣用表現は，さほど特殊なものではなく，ごく一般的なものであるが，これが『聖書』に由来する表現であるということは意外と知られていないと思われる。

現在，最もスタンダードな日本語版『聖書』と考えられる，日本聖書協会刊行の『聖書 新共同訳』から，該当の箇所を以下に引用する（下線は本稿の著者による)。

> さて，サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し，殺そうと意気込んで，大祭司のところへ行き，ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは，この道に従う者を見つけ出したら，男女を問わず縛り上げ，エルサレムに連行するためであった。ところが，突然，天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ，「サウル，サウル，なぜ，私を迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ，あなたはどなたですか」と言うと，答えがあった。

「わたしは，あなたが迫害しているイエスである。〜」（中略）サウロは地面から起き上って，目を開けたが，何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間，目が見えず，食べも飲みもしなかった。

（中略）

そこで，アナニアは出かけて行ってユダの家に入り，サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル，あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは，あなたが元どおり目が見えるようになり，また，聖霊で満たされるようにと，わたしをお遣わしになったのです。」すると，たちまち目からうろこのようなものが落ち，サウロは元どおり見えるようになった。そこで，身を起こして洗礼を受け，食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間，ダマスコの弟子たちと一緒にいて，すぐあちこちの会堂で，「この人こそ神の子である」と，イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆，非常に驚いて言った。「あれは，エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。またここへやって来たのも，彼らを縛り上げ，祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」しかし，サウロはますます力を得て，イエスがメシアであることを論証し，ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

（使徒言行録 9）[2)]

ちなみにこの「使徒言行録」の 9 は，「新共同訳」においては「サウロの回心」という「見出し」が付けられている[3)]。この見出しからも分かるように，この箇所は，サウロと呼ばれる人物が特殊な体験を経て，イエスを迫害する者から宣べ伝える者へと，生き方が大きく変えられることが描かれている。生き方が大きく変えられたことは，このサウロという人物が，この後，“パウロ”と呼ばれるようになり，名前まで変わってしまうことからも分かる。

このような，生き方を大きく変えるほどの特殊な体験を，象徴的に表現しているのが，下線を引いた「目からうろこのようなものが落ち」の部分である。

さらに，あわせてふれておくべき点として，上の引用において，当該の表現には“たちまち”という修飾句がついているということがある。すなわち，「突然」あるいは「急に」，事態が起こったのであり，「徐々に」あるいは「しだい

に」起こったわけではないということが表されているのである。

結果として，この表現の表す意味には，「突発性」「瞬間性」のようのものが含まれ，「漸次性」「持続性」のようなものは含まれないことにつながる。また，この点は，この表現の意味・用法を記述する際に重要である。

まとめると，“目からウロコ（が落ちる）”という表現の，出典となった『聖書』の該当箇所に基づく意味，言わば「原義」のような意味は，次のようになろう。

(4)（突然の）特殊な経験により，その後の生き方が変えられるほどの大きな影響を受けたことを，象徴的に表す。

ただし，詳細は後述するが，実際の用例を観察した場合，このような意味で用いられていることは非常に少ないと言ってよい。しかしながら，“目からウロコ（が落ちる）”という表現における複数の「用法」は，上の(4)そのものではなくても，これを源としていると考えられる。詳細は後述する。

２．２．辞書の記述とその問題点

既存の辞書において，この表現がどのように記述されているかを確認しておこう。

この表現が立項されている辞書の記述をみると，どの辞書も似たような記述となっており，大きな違いはないと言える。ここでは，『日本国語大辞典 第二版』（小学館），『広辞苑 第七版』（岩波書店），『新明解国語辞典 第七版』（三省堂）の三つを見ておく。いずれも“目から鱗(うろこ)が落(お)ちる”のように，“～が落ちる”という述語まで伴った形で立項されている。

(5) 新約聖書の「使徒行伝」から出たことば。何かがきっかけとなって，急に物事の事態がよく見え，理解できるようになるというような場合のたとえとして用いられる。

＊引照新約全書(1880)使徒行伝・九「彼の眼(メ)より鱗(ウロコ)の如もの脱(オチ)て再び見ることを得，すなはち起てバプテスマを受」

＊トカトントン(1947)〈太宰治〉「それを聞いたとたんに，眼から鱗(ウロコ)が落ちるとはあんな時の感じを言ふのでせうか」

（『日本国語大辞典 第二版』小学館）

(6)（新約聖書の使徒言行録九章から）あることをきっかけとして，急にものごとの真相や本質が分かるようになる。

（『広辞苑 第七版』岩波書店）

(7) 何かがきっかけになって，今までよく分からなかった事が突然はっきり分かるようになる。[出典は新約聖書。もと，失明していた人が突然視力を回復する意]

（『新明解国語辞典 第七版』三省堂）

いずれも，この表現が『(新約) 聖書』を出典としていることが明示されており，意味の記述において，「きっかけ」があり，「急に／突然」，「分かる／理解できるようになる」という三点で共通性を有している。

前述の(4)と比べてみると，「きっかけの存在」や「突発性／瞬間性」のような面は類似しているものの，辞書は共通して，きっかけ後の状態を「分かる／理解できるようになる」ということに限定している点が注目される。この点がなぜかを考えるのも必要だが，同時に，本当にそれでよいのかということも考えなければならない。実際の用例を観察すると，物事の「事態」「真相や本質」，あるいは「今までよく分からなかった事」が「分かる／理解できるようになる」というよりも，単に「知らなかったこと」を「知る」というような意味が表されていることが多いからである。以下に再掲する(3)を改めて参照されたい。

(3) しかも力もいらず，誰にでもきれいなクラッシュアイスができるのです。まさに目からウロコの裏ワザですね。[B]　（再掲）

「分からなかったことが分かるようになる」ということと「知らなかったことを知る」ということは同じではない。

この表現は，いくつかの用法に分類して記述されるべきものと思われる。既存の辞書の問題点は，用法の分類という観点を持たず，単一の意味で記述しようとしているところにあると言える[4)]。

２．３．形態的バリエーション

本稿における考察の前提として，本稿が対象とする“目からウロコ（が落ちる)”という表現の形態的バリエーションについて確認しておこう。

まず，形態的というよりも単に表記上の問題だが，“ウロコ”の部分は，平仮

名表記の“うろこ”も，漢字表記の“鱗”もあり得る。しかしその違いは，意味・用法の記述に影響を与えない。本稿では，タイトルにもあるように，代表させて“ウロコ”という片仮名表記を用いるが，“うろこ”“鱗”ともに含むものとする。以下において，この違いには一切こだわらず，用例を観察することにする。

形態的バリエーションとして，第一に，述語部分の他動性について。

この表現に含まれる述語動詞“落ちる”は，いわゆる自他対応を持つ動詞であり，その自動詞形である。用例を観察すると，ごく少数ではあるが，他動詞形である“落とす”が用いられている場合がある（それに伴い“ウロコ”の格標示はヲ格に代わる）。

(8) ～という指摘は，いまなお多くの読者の目から鱗を落とすだろう。[A]

(9) 深い思索と透徹した洞察力をうかがわせる作家たちは，無知な私の目からうろこを落とし，未知の世界に誘う心の旅の「師」となって，～ [B]

(10)そのようなイメージがどこまで真実なのか，しっかりと見極めたい。目からウロコを落とさなければならないことがたくさんあると思う。[A]

(11)～かつての私のような民間人官僚はもっと増やして「目から鱗を落とす」べきだ。[B]

一般的な他動詞用法の(8)(9)に対して，(10)(11)は再帰的な他動詞用法という違いはあるものの，形態的に“～ヲ落とす”という他動詞形が用いられている点では変わりはない[5)]。

これらは，おそらくいわゆる「逆形成」により生じたものであると思われるため，この表現のバリエーションの一つとしてとらえ，特殊な扱いはしない。

第二に，述語にかかる修飾句について。

この表現の述語部分“落ちる”には，副詞的な修飾句が付く場合がある。

(12)運動能力を鍛えるって，こういうことなのか！と目からウロコがぼろぼろ落ちる [B]

(13)目からウロコがポーンと落ち，～ [B]

このような修飾句は，この表現が表す意味の特定の側面を強調するものとは思われるが，本稿における考察においては，重視しない。

第三に，他の名詞との複合について。

採集した用例の中には，他の名詞と複合し，全体で一つの複合語になっているものも観察されたが，ごく少数であり，本稿では大きく取り上げることはしない。

(14)ものの見事に 20 分で編集してくれていて，目からウロコ状態になること必至［B］

(15)保健士さんに相談するのも良いですよ。遊びの関わり方など教えてもらい，目からウロコものでした。［B］

３．記述

３．１．用法の分類

この節では，いよいよ“目からウロコ（が落ちる)”という表現の意味・用法について考察するが，予め見取り図を示しておくと，次のようになる。

“目からウロコ（が落ちる)”という表現は多義であり，複数の用法を持つ。そして，その用法は，次のような三つに分類される。

・ある種のきっかけにより，(突然) 新しい境地が開けることを表す。これを「開眼」用法と呼ぶ。

・ある種のきっかけにより，(突然) あることが分かる／理解できるようになることを表す。これを「腑に落ちる」用法と呼ぶ[6)]。

・意外性／驚きのある新規情報を獲得することを表す。これを「意外性の表示」用法と呼ぶ。

以下で，それぞれの用法ごとに考察する。

３．２．「開眼」用法

次のような例を見られたい。

(16)「死んだら，人間しまいでしょ」。そうでもないけどな，と思いながら夕方の回診の時，「死と成長，このおかしなパートナー」という米国の精神科医の書いた小文をコピーして渡した。翌日，「先生，私，目からうろこです。死ですべては終わりなんかじゃない。私，死，受容しました」。よかった。女性は化粧をして生き生きと関西に帰っていった。［A］

(17)もっと深く味わいたいと思ったら，今度はやさしく書いた美術書などを読むと，またあらたな発見がある。粗大ゴミが美術作品となって生まれ変わる時，美術によってあらゆる価値が変換することに気付くと，目からウロコが落ちる。そんな状態になったらもうあなたは現代美術ファンだ。[A]

(18)子どものころ，食べられるキノコ以外はまったく興味がなかった。ある時，書店で手に取ったキノコの写真集を見て目からうろこが落ちた。その魅力に引き込まれ，日本菌学会に入会。[A]

(19)このユニークな新約学者の著作は，私のキリスト教観を根底から覆した。目から鱗が落ちたとはこのことだ。[A]

上のような例で，“目からウロコ（が落ちる）”は，ある種のきっかけにより，新しい境地が開けたことが表されていると思われる。ここで言う「新しい境地が開ける」とは，考え方や嗜好等の心的状態が新たにされるというくらいの意味である。

「ある種のきっかけ」は多くの場合，新規の知識／情報の獲得であり，そのようなきっかけを通して，影響を受け，その結果，新しい境地が開けたことが表されているということである。

これは，「原義」である(4)から概ね類推できるものである。直接的には出てこない「新しい境地が開ける」の部分も，「目が見えるようになる」ということからの類推が成り立つと思われる。「開眼する」という語句があるように，「目が見えるようになる」／「目を開く」ということは，メタファー的に「新しい境地が開ける」ことを類推させるからである。

この点に基づき，この用法を「「開眼」用法」と呼ぶことにする。

(20)「開眼」用法：ある種のきっかけにより，（突然）新しい境地が開けることを表す。

この用法は，「原義」に近く，他の用法への拡張の源になっていると見なせるため，拡張の起点という意味での「プロトタイプ」としての用法と言える。しかしながら，頻度という点について言えば，この用法は必ずしも使用例が多いわけではなく，“目からウロコ（が落ちる）”の代表的な用法とは言えない。

３．３．「腑に落ちる」用法

次のような例を見られたい。

(21)英語ってこんなに易しかったのか，と目からウロコが落ちる思いをさせられた～［B］

(22)仏教の入門書を数冊読んでみたのです。すると意外，仏教は今を生き生きと生きるための宗教のようです。目からうろこが落ちる思いでした。［A］

(23)その後，親しくなって理由を聞いてみた。不慣れで友達も少ないからだと話された。目から鱗の思いだった［A］

(24)発想の転換ってこういうことかな。見方を変えると別世界。心の柔軟性って大切だ。目からウロコが落ちた。答えは意外とシンプルだったのだ。［B］

(25)名簿はアルファベット順で，F の名字は早いほうの番号だったのだ。「名簿はアイウエオ順」という思いこみを覆され，目からウロコだった。［B］

(26)「目からうろこ，のようなのが良問。算数なら例えば，補助線 1 本引いたら答えが見えてくる図形問題とか」と～［B］

(27)田辺聖子さんの小説を読んでいると，「大阪弁にはあなたという言葉はない」という一節にぶつかった。目からウロコ，であった。確かに，確かに。［B］

これらにおいて，“目からウロコ（が落ちる）”は，ある種のきっかけにより，何らかのことが分かる／理解できるようになったことが表されていると思われる。

前述の「開眼」用法と比べた場合，「ある種のきっかけ」がある点，そしてそれは多くの場合，新規の知識／情報の獲得であるという点は共通しているが，その後に何らかの影響を受けるというようなことは背景化されており，むしろそのようなきっかけを通して，何かが分かる／理解できるようになるということに焦点があたっていると言える。

これは，前述した既存の辞書の記述にほぼあたるものである。既存の辞書はなぜかこの用法に特化して記述していると言い換えてもよい。この用法を特別

に重視する理由があればそれでもよいが，それは見当たらない。この用法が，量的に突出して多いということもない。既存の辞書の記述は必ずしも適切とは言えないということになる。

さて，それではなぜ，このような意味が焦点化された用法が生まれたのであろうか。

まず，“分かる／理解できるようになる”ということと言い換えができるような類義表現を考えてみよう。例えば，“納得する”“得心する”“了解する”“合点がいく”等があげられる。そしてこのような語群に，“腑に落ちる”も加えられる。

“腑に落ちる”は，“胸に／心に落ちる”でもほぼ同義である。いずれにしても，このような形式をとることによって，“落ちる”は，「納得する」というような意味を表し得る。そして“目からウロコが落ちる”も述語は“落ちる”である。

この用法が確立するにあたって，「納得する」という意味の“落ちる”が用いられる“腑（胸／心）に落ちる”からの類推があったのではないかと示唆されるのである。ただし，このような類推があったとすることは，さほど不自然ではないと思われるが，ここでは論証できているわけではなく，あくまで示唆にとどまるものである。

しかしながら，意味および形態において，この用法と類似していることは確かなので，この用法を「「腑に落ちる」用法」と呼ぶことにする。

(28)「腑に落ちる」用法：ある種のきっかけにより，（突然）あることが分かる／理解できるようになることを表す

３．４．「意外性の表示」用法

次のような例を見られたい。

(29)［「「ドラゴンボール」に新鮮な驚き」という見出し付き］
「ドラゴンボール」に出会った時，目からウロコが落ちる思いでした。ヨーロッパのコミックは 20 年たっても変わらないのに，日本のマンガは現代の子供に訴える内容だったから。主人公は一見，ヒーローではなく，普通の子。読者と同じ目線で成長する過程が新鮮でした。［A］

(30)PVA は洗濯のりや液体のりの主成分。山崎さんは実際コンビニの液体のりでも培養できることを確認した。共著者で理化学研究所で細胞バンクを手がける中村幸夫室長は「結果を疑うほど驚いた。研究者はみんな目からウロコではないか」と話した。[A]

(1) そのときの驚きをどう表現すればよいのでしょう。まさに目からウロコが落ちた思いでした。[B] (再掲)

(31)私が目からウロコだったのは，7 月初めには，秋の虫のコオロギやバッタが田んぼのまわりの草むらで大量に生まれ育っているという事実だった。それまではまったく知らなかった。[A]

これらは，意外性あるいは驚きのある新規の情報を獲得したということが，あるいは文型によっては，当該の情報が意外性あるいは驚きのある新規のものであるということが，表されていると思われる。

後者の場合の文型とは，“Xは，目からウロコだ”あるいは“目からウロコのX”のような“X＝目からウロコ”が意味される場合のことである。

この用法は，新規情報の獲得という点では他の用法と共通するが，他の用法とは異なり，単に情報を獲得したこと，そしてその情報が意外性／驚きのある新規のものであることのみが表されるのであり，そのような情報を獲得したことにより,何らかの影響を受けたことまでは含意されないところに特徴がある。新規情報の獲得ということのみが焦点化されていると言ってもよい。

例えば，次の(32)は下線部を“驚き”に，(33)は下線部を“驚く”に，大きく意味を変えることなく，置き換えることができる。

(32)当時，環境浄化や再生技術を産業として興すという考えは，目からウロコの発想だった。[A]

(33)「サンドイッチは中身よ。外見なんか関係ないわ」と言っているあなた，“外側”のパンに注目してみない？「パンが違うとこんなに味が違うんだ！」と，目からウロコのはず。[B]

影響を与えるほどの情報ではないということは，この用法において新規に得られる情報が，さほど重大なものではないということからも分かる。既存の辞書にあった「物事の真相や本質」のような大げさなものでは全くない。

例えば,「一般的な方法ではなく，あまり知られていないが，知ると有益な情

報」のような意味で用いられる“裏ワザ”という語には，この用法の“目からウロコ”が，言わば枕詞的に修飾句としてつくことが散見される。

(3) しかも力もいらず，誰にでもきれいなクラッシュアイスができるのです。まさに目からウロコの裏ワザですね。[B]（再掲）

(34)卵白の泡立てや，固まったはちみつのとかし方，こんにゃくやゴボウのあく抜きなど，目からうろこの裏ワザも満載 [B]

これは“裏ワザ”の持つ意味が，この用法の“目からウロコ”と親和性が高いからだと思われる。

もちろん“裏ワザ”という語だけでなく，ちょっとした役に立つ情報やアイディア，あるいは技術や方法等を表す語にも，以下の例に見るように，すべて“目からウロコの～”というように連体修飾句の形で，この用法は，頻繁に用いられる。

(35)目からウロコのお役立ち情報

(36)目からウロコのアイディア満載

(37)目からうろこの節約術

(38)目からうろこのとっておきレシピ

さらに言うと，この用法は，「意外性／驚きのある新規の情報」を与えることを目的とする書物のタイトルに非常に多く用いられる。次はほんの一例である。

(39)『目からウロコのお掃除の裏ワザ』『目からウロコの日本経済論』
『目からウロコの幕末事件簿』『目からウロコの家づくり』
『目からウロコの経済学入門』『目からウロコのホントの話』

(40)『目からウロコ！先生のためのコミュニケーション』
『知ってなっとく，目からウロコ！数学のうんちく』

(41)『おもしろ物理雑学 目からウロコ篇』
『「情報の数学」再入門－目からウロコ』

上の(39)のように，やはり“目からウロコの～”という形をとることが多いが，(40)(41)のようなアレンジ型も存在する。しかし，表している意味は同じであり，同一の用法とみなせる。

このような用法を，「「意外性の表示」用法」と呼ぶことにする。

(42)「意外性の表示」用法：意外性／驚きのある新規情報を獲得すること

を表わす。

この用法は，「原義」からは大きく離れたものであるが，現在，“目からウロコ（が落ちる）”の最も代表的なものであると考えられる。その点でも，既存の辞書がこの用法を記述していないことは不適切だと言えよう。

それでは，この用法はどのように発生したのかが問題となるが，この点は次節で考察を行うことにする。

４．分析

前節で，“目からウロコ（が落ちる）”には，「「開眼」用法」「「腑に落ちる」用法」「「意外性の表示」用法」の三つの用法が認められることを述べた。

これらのうち，前二者については，用法としての記述とともに，「原義」からの拡張について，簡略ではあるが示唆を行った。

ここでは残る「「意外性の表示」用法」について，分析を試みる。

この用法は，「原義」からは大きく離れており，「原義」からの拡張で説明することには困難さが伴う。そこで異なった視点を取り入れてみることにする。

言うまでもなく，“目からウロコ”は述語を省略した場合，“ＡカラＢ”という形式をとることになる。

さて，このような“ＡカラＢ”という形式をとる慣用句は他にも次のようなものがある。

・“藪から棒”

(43)あなたは，古書売買の他にも，モグリの金貸しをしていますよね」「な，何でっか。やぶからぼうに！」下条社長は，激しくうろたえた。「でも，そうなんでしょう？」　[B]

(44)今までの私たちとのやり取りとはまったく違った雰囲気で藪から棒に言われたものだから，課長は思わず，「あ，はいはい」と答えた。[B]

・“棚からぼた餅”

(45)埼玉だろうと岐阜だろうと，国会議員になれればどこでもいいんじゃないの？。棚からぼたもちってこういう事なんでしょうね。もちろん当選すれば！ってことですけど・・・[B]

(46)金儲けにチャレンジするのだから生やさしいことでは決してできない。

座して 棚からボタモチはころがり込んではこない。それくらいの努力はあってしかるべきだ。[B]

・“瓢箪から駒”

(47)恐らく今季で大矢監督も引退となる可能性が大である。瓢箪から駒で，野村監督は，ひょっとしたら横浜ベイスターズのユニフォームを切る可能性が高い。[B]

(48)それにしても和解できるまで早かったねえ。まさに，ひょうたんから駒の感じだよ」「会社は火の手が燃え上がる前に，ボヤのうちに消し止めたかったんじゃ～ [B]

これら“藪から棒”“棚からぼた餅”“瓢箪から駒”はすべて“ＡカラＢ”という形式をとっており，そして表す意味はそれぞれ異なるが，いずれも何らかの「意外性／驚き」が表される点では共通している。

当然ながら表される事態が「ふつうではない」ということが前提ではあるが，それに加えて，“ＡカラＢ”という形式，これを言わば「型」として，「意外性／驚き」が表されているともみなすことができよう。

本稿の考察対象である“目からウロコ”も同じくこの「型」を持つものであるため，この「型」の持つ意味からの類推があったのではないかと想定されるのである。

さらなる検証が必要ではあるが，ここでは，このような「型」の持つ意味からの類推を仮説として示唆しておく。

５．おわりに

本稿は，日本語において『聖書』に由来すると考えられる語彙の中で，“目からウロコ（が落ちる）”という慣用表現を取り上げ，その意味・用法の記述，分析を行った。

ここで詳細を振り返ることは控えるが，この表現に対して，既存の辞書にない用法も含めて記述を行い，また用法間の拡がりに関して，示唆にとどまるものの分析を行うことができたと考える。

今後の発展として，次の二点をあげておく。

複数の要素からなる，特定の「型」が，それ全体で一つの特定の意味と対応

している場合，その「型」と意味の組み合わせは，「構文(construction)」と呼ばれることがあるが，本稿における「「驚きの表示」用法」で示唆した分析は，まさに「構文」を用いた分析ということができる[7)]。

本稿で示された“ＡカラＢ”のような比較的単純な「型」によって，「構文」が検証されることは，従来あまりなかったと言えるので，本稿の分析をさらに進めることは，「構文」を用いた研究一般に対しても意義を有すると思われる。

また，三宅(2017)等でも議論されているように，「情報を新規に獲得する」ということと「驚きの表示」ということの関係については，例えば“ジャナイカ”等の文末形式の記述，分析にも問題になる点である。

今後さらに追究されるべきことであると思われる。

注

1）以下の用例の末尾に付した[A],[B]という記号は出典の略号である。巻末の「用例の出典」を参照されたい。

2）「使徒言行録」は「新約（聖書)」を構成する 27 巻の内の 1 つである。ここで引用した「新共同訳」より以前に日本聖書協会から刊行されていた「文語訳」「口語訳」では，「使徒言行録」ではなく「使徒行伝」と呼ばれていた。また，「9」という数字は，この巻の中の第 9 章を意味する。

3）「新共同訳」では，内容上のまとまりにあわせて，適宜「見出し」が付されているが，これは『聖書』の本文には含まれない。

4）この表現の各用法に共通する本質的（抽象的，基本的）な「意味」あるいは「スキーマ」があることを否定するものでは，もちろんない。

5）採集した用例の中に，他動詞形をさらに使役化したものがあったが，ごくまれなものである。

（ｉ)～しかも知らなかったトピックなどを持ち出して来て目からウロコを落とさせてくれる，[B]

6）“腑に落ちる”という慣用句は，本来“腑に落ちない”のように否定の形で用いられるものであって，肯定の形では「誤用」であるとする説があることは承知しているが，この点は，本稿の議論において本質的なことではないので，気にせず，この語句を使用することにする。なお，参考までに付

記しておくが，BCCWJ でこの語句を検索すると，全 161 例中 32 例が肯定の形であり，残りは否定（“～ん”“～ぬ”“～かねる”等も含む）の形であった。

7）ここで言う「構文」は，教育上あるいは研究上の便宜のために設定されるカテゴリーではなく，それ自体が一つの単位と見なされるもので，複数の要素の集合体が表す意味が，それを構成する各要素の意味に還元できない場合，言い換えると，各要素の意味の加算とは言えないものである場合に認められるものである。詳細は，三宅(2011)を参照されたい。

用例の出典

[A]:『朝日新聞』朝日新聞社

[B]:「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」国立国語研究所

参考文献

三宅知宏(2001)「日本語における『聖書』由来の語彙Ⅰ－“洗礼”をめぐって－」『鶴見日本文学』第 5 号 pp.109-125 鶴見大学大学院

三宅知宏(2002)「日本語における『聖書』由来の語彙Ⅱ－“～ありき”をめぐって－」『鶴見日本文学』第 6 号 pp.89-109 鶴見大学大学院

三宅知宏(2004)「日本語における『聖書』由来の語彙Ⅲ－“新しい（古い）皮袋”をめぐって－」『鶴見日本文学』第 8 号 pp.63-81 鶴見大学大学院

三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

三宅知宏(2017)「否定疑問文と確認要求的表現－対照方言研究の一試論－」『阪大日本語研究』29. pp.1-18 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

（文学研究科教授）